

# ドイツの切手に現れた科学者、技術者達(1) アルベルトス・マグナス

*Scientists and Engineers in German Stamps (1). Albertus Magnus*

筑波大学名誉教授 原田 馨  
KAORU HARADA

*Doctor of Science, Professor Emeritus, University of Tsukuba.*



西ドイツ発行(1961-1964)の有名な  
普通切手、アルベルトス・マグナス  
(1200頃-1280)

## 連続掲載にあたって

今回「ドイツの切手に現れた科学者、技術者達」という標題で短い読み物を連載することになりました。標題に科学者、技術者と云う言葉を使いましたが、古い時代にはこのような言葉はありませんでした。科学者と云う言葉は19世紀の30年代に科学研究を行い、その事を職業とする人が社会に現れた時期にイギリスの学者W.ヒューエルにより提唱されました。ガリレイ、ニュートンは科学者ではなく哲学者と呼ばれました。古い時代の哲学は多くの学問を含んでいました。連載をはじめるにあたり昔は科学者と云う言葉がなかったことをまず述べたいと思います。

## アルベルトス・マグナム

アルベルトス・マグナス、Albertus Magnus(1200頃~1280)はドイツの神学者、哲学者そして自然学者であり、南ドイツのラウインゲン(Lauingen)に生まれた。貴族の出で、本名はAlbert, Graf von Bollstädtと云う。ラテン語に翻訳されたアリストテレスの古典などについて学んで得た彼の深い学識の故に“偉大なるアルベルト”(Albertus Magnus)、また“万能博士”(Doctor Universalis)と呼ばれた。アルベルトスはその学識の故に魔術師の疑いを受けたが、彼のキリスト教信仰の正統性とキリスト教組織における高い地位の故にその疑いから免れることができた。

ゲルマン諸族の侵入により西ローマ帝国は崩壊し古代は終わつた。崩壊した広大な地域はキリスト教の新しい権威のもとにヨーロッパを形成した。それ故ヨーロッパはキリスト教と不可分の関係にある。西ヨーロッパの地域はローマカトリックにより支配され、長い中世の間に古代文明の遺産を失いギリシア語を解する者も居なくなつた。12世紀になるとアラビア語に翻訳されたギリシアの古典をラテン語に翻訳する作業がトレドなどで組織的に行われるようになった。この文化移転の運動を1400年代のイタリア・ルネッサンスと区別して「12世紀ルネッサンス」と云う。このように西ヨーロッパは多くの古代文化を吸収し13世紀には

次第に西ヨーロッパ独自の文化の創造が始つた。次の14世紀は困難な時代(飢饉、戦争、ペスト)であつたが、これを乗り越えた西欧は、15世紀以降急速に独自の文化発展の道を進んだ。イタリア・ルネッサンスはこの時代における文化的爆発であり、これを準備したのが12世紀ルネッサンスであつた。これに反して西欧に先んじて500年にわたり栄えた輝かしいイスラム文化は13世紀以降ゆるやかに沈滞の時代に入つた。歴史の流れから見れば古代ギリシアの文化がイスラム文化を介して西ヨーロッパに再び花咲いたのである。

このように13世紀の西ヨーロッパはようやく中世の文化的停滞から脱し、キリスト教のもとに社会秩序が生まれ、農業生産が拡大し、商人階級が生まれ安定した社会に学校と大学が設立され、知識人が生まれた時代であつた。そして西ヨーロッパは独自の文化の創造をはじめた。例えば13世紀に始つた巨大なゴシック様式の大聖堂(カテドラル)の建設は西ヨーロッパがはじめて創造した巨大な独自の建築様式であつた。またアルベルトスが発展させたスコラ学(Scholasticism)もまた西欧が生み出した独自の学問であつた。13世紀はスコラ学の最盛期であり、アルベルトスはこの学問の最も盛んな時期の学者であつた。スコラ学はいろいろ曲折はあつたが古典古代の文化を受容し、キリスト教的思想(ヘブライズム、Hebrewism)をギリシヤ的思想(ヘレニズム、Hellenism)と結合することによりキリスト教の基礎を固めることを目標とした。言い換えればより広い視点から神、人、自然をキリスト教の本質を変えることなく論理的に関係づけ、神には神の座を構築することであつた。アルベルトスは彼の弟子トーマス・アクィナス(1225-1214)と共に13世紀のスコラ学を発展させた代表的人物であつた。その成果はトーマスの「神学大全(Summa Theologia)」に集約されている。神学以外にアルベルトスとトーマスは自然について深い学識と理解を持っていた。

アルベルトスの植物学、錬金術についての学識は同時代の知的敵対者ロージャー・ベーコン(Roger Bacon, 1214-1294)以外の多くのスコラ学者が持っていないものであつた。

アルベルトスのラテン世界における思想史上の功績は古代ギリシアの古典、特にアリストテレスの哲学及び自然学を学び、理性と信仰について明快な定義を下したことである。理性は自然界を理解することができるが、信仰は理性を超えるものであり、理性は信仰に取つて代ることができない。即ち理性には限界があり、哲学は理性の領域における活動であり、神学は信仰の領域にかかわるものである。この理性と信仰、即ち哲学と神学の間に調和を求めることにより自然界と信仰の世界についての理解を深めようとした。しかしスコラ学においては理性と信仰のどちらに重きを置くかと云うことが問題となる。このアルベルトスの哲学と神学においては未だ理性の信仰に対する優位は確立されておらず、哲学の立場からの神の存在論、三位一体論などは哲学の領域を超える問題であつた。アルベルトスは更に靈魂について論じ、神に到る瞑想へと進む新プラトン主義的神秘的靈魂論を展開した。このようなアルベルトスの立場は後のドイツ神秘主義の起源となつたとされている。

アルベルトス・マグナスの記念碑、記念板はドイツ各地にあるが、私が訪ねることができた記念碑は図1~7などであつた。(尚、掲載写真は、全て著者原田馨先生の撮影によるものです)



図1  
フライブルグ大学(Universität Freiburg)の或る建物の壁に大きな講義(説教)するアルベルトスの像が掲げられている。

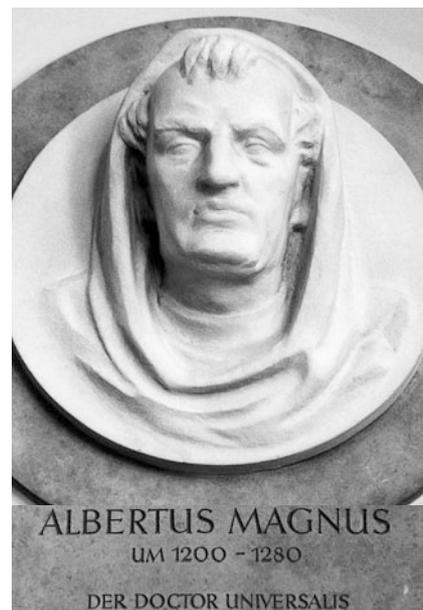


図2  
ミュンヘンのドイツ博物館(Deutsches Museum)は世界有数の大自然科学博物館である。博物館には荣誉の間(Ehren Saal)があり、自然科学と技術に貢献したドイツ人の胸像(と肖像画)がある。その中にある最も古い人物像はアルベルトスの胸像である。

## ドイツの切手に現れた科学者、技術者達(1) アルベルトス・マグナス



図4

アルベルトスが生れたラウインゲン(Lauingen)の町のマルクト・プラッツには書物を持った彼の立像が台の上に立っている。



図3

1980年に西ドイツ政府が発行したアルベルトス・マグナス(Albertus Magnus、哲学者、神学者、自然科学者、1200後頃-1280)の没後700年の記念切手。アルベルトス・マグナスはドイツが生んだ最も古い時代の学者の一人であり、哲学者、神学者であると共に植物学、錬金術に詳しかった。



図5、図6

アルベルトスが司教をしていたレーゲンスブルグ(Legensburg)のアルベルトス・マグナス・プラッツのドミニコ会の建物の脇に彼のブロンズの胸像がある。(図5、6)

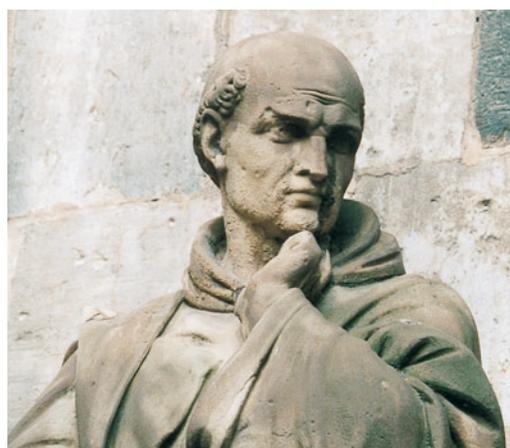


図7

アルベルトスが長期間滞在したケルン(Köln)の聖アンドレアス教会のそばに彼の石の立像がある。同じく同地のケルン大学の本部棟と哲学棟の間にアルベルトスのデフォルメされた座像がある。当時像の鼻は赤いペンキが塗られていた。

### 表紙写真

#### シナノキンバイ

この鮮やかな黄色は、高山で最も目につく植物の一つで、黄一色のその群生は見事なもの。信濃の金盃という名のごとくサカズキ形の花を咲かせます。これを食してみる人はいないでしょうが、見た目ほど優しくなく、口にすると激しい下痢を引き起こします。  
草丈およそ50cm・花径 4~5cm

### 編集後記

あけましておめでとうございます。

我が国の経済は昨年よりのデフレ現象が続いており、一向に景気回復の兆しが見えない状況にあります。また、本年の天気予報は暖冬とのことで、関東以西の太平洋側でも雪が多く降り、雪対策に頭を痛める年になりそうですが、その自然現象の変化を契機に、景気動向も右肩上がりの変化になることを期待するところです。

本誌「THE CHEMICAL TIMES」は、昭和25年の

創刊以来52年間、今回の発刊で187回目を迎えています。これも偏に愛読者の皆様方ならびにご執筆の先生方のご愛顧、ご支援の賜物と深く感謝申し上げます。弊社では、本学術誌がご愛読者の皆様方にとりまして、読みやすく、お役に立つ情報提供となることを願い、今回の第187号より、弊社ホームページに、本誌の内容についても掲載を開始いたしました。

何卒、本年も尚一層のご愛顧、ご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。  
(三城記)



関東化学株式会社

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町3丁目2番8号  
電話 (03) 3279-1751 FAX (03) 3279-5560  
インターネットホームページ <http://www.kanto.co.jp>  
編集責任者 三城 侑三 平成15年1月1日 発行